

四旬節第五主日

福音朗読 ヨハネ 8・1-11

2022.4.3

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音のこの場面は、聖書がお手元にないと分からないかもしれませんが、ヨハネ福音書のどのような続きの中で今日のこの場面が語られているか分かりにくいところがあるかもしれません。それだけに、むしろ、周りの今までの文脈と関係がないと思われるようなこのエピソードが、逆にわたしたちの注意を引き付けているように思えます。

今日の福音の中で、イエスは神殿の境内に座って、周りに集まって来た人々にいつものように教えを宣べ伝えておられます。そこに、このエピソードの中の婦人が、彼女を捕えて神殿の境内まで引き立てて来た人々の中に立たされています。そして、彼女を引き立てて来た人々はイエスに問います。「先生、このような女性は、モーセの律法によればその場で石殺しにされるべきだ。ところで、あなたはどう思われますか」。そのようにイエスに問いかけます。イエスは身をかがめて地面に何かものを書き始めた、というふうに語られています。

イエスは、身をかがめることによって、おそらくその場に自分を捕えて引き立てて来た人々の真ん中に身を突っ伏すようにしてうずくまっているその女性の傍らにイエスも共に身を低くして、彼女と一緒にまさに裁判の被告席に立つ者のように、その女性を裁く者としてではなく、彼女と共にその人々の糾弾的になって、身を低くして彼女の傍らにいてくださるイエスのお姿がそこにあります。

そのイエスは、人々の糾弾の嵐の中で身をかがめながら、その指で何かものを書き始めた、というふうにより今日の福音は語っています。わたしたちは、イエスがあの時に何を書かれたのか、ということに好奇心を掻き立てられるかもしれませんが、福音書はそのことについてわざと何も語らないかのようです。イエスが指で何を書かれたか、いろいろわたしたちに想像させることが福音書の目的かもしれません。そのように思って、イエスがあの時地面に指で何を書かれたか、ということは、わたしたちの想像にまかせられているというふうを受け止めて、敢えて考えると、旧約聖書の出エジプト記、モーセに神様が

最初にお与えになられた石の板は、神様の指でそのモーセの律法の掟が書き記されていた、というふうに語られています（出エジプト 32・15-16）。イエス様が指で書かれたことが、あの律法の石の板に神様が指で書かれたと言われているその掟の言葉をイエス様が地面に書かれたというふうに考えることは、考えすぎかもしれません。けれども、そうやってイエス様が指で地面に書かれた神様の掟かもしれないその言葉は、まさに地面に指で書かれたことによってすぐに消え去ってしまいます。そのようにして、イエス様は律法の掟は掟としてそこに書き記しながら、それはすぐに消え去るようにして、そこにうづくまるようにしているその女性に対して、掟は掟として、「わたしはあなたを罪に定めない」、そのように、立ち上がって言ってくださいます。彼女の中の罪の意識は、イエス様が指で書かれたその掟の文字が吹き消されるように消されていったのです。

立ち上がられたイエス様は復活のイエス様のようです。「わたしもあなたを罪に定めない。もうこれからは罪を犯してはならない」。主のこの言葉を、この四旬節の間、わたしたちの心の深くに刻み込んでいただいて、新しい生き方に向かって主の過ぎ越しの祝いを共に喜びの内に祝い合うことができるように、このミサの中で、お互いのために、わたしたちの共同体である高円寺教会の皆さんのために、ご一緒にお祈りいたしましょう。